

米軍基地移設問題に揺れる沖縄で、学生たちが見たものはなにか。文学部人文・ジャーナリズム学科の「沖縄ジャーナリズム論」(沖縄タイムス社の協力講座)集中講義(2013年9月3〜7日)に参加した二人の学生に寄稿してもらった。沖縄を考える学習は、現地合宿後も続き、山田健太・藤森研西教授の指導のもと、学生たちは自主的に勉強会を開催。また、2月18日午後2時から、専修大学サテライトキャンパスに沖縄タイムス社の長元朝浩専任論説委員を招き、沖縄県知事の辺野古埋め立て承認、名護市長選や沖縄と本土との報道格差などについて話を聞く。



辺野古のキャンプ・シュワブにスラリと掲げられた基地反対のポスター



エルドリッジさん(前列中央)を囲んで。左隣が吉田さん、右から人目が志田さん

「基地問題」考える

現実を見て見ぬふり

本土の無関心の「壁」

吉田 汀子(3年次)

真っ青の海と白いビーチ。そこに立つフェンスと有刺鉄線。フェンスに貼られた色とりどりの基地反対ポスター。これは私が目にした、辺野古のキャンプ・シュワブの光景だ。

2013年9月、私は「沖縄ジャーナリズム論」の授業の一環で沖縄を訪れた。初めて降り立って、なにもいえない異国感をこの島に感じた。本土に

真つ青の海と白いビーチ。そこに立つフェンスと有刺鉄線。フェンスに貼られた色とりどりの基地反対ポスター。これは私が目にした、辺野古のキャンプ・シュワブの光景だ。

2013年9月、私は「沖縄ジャーナリズム論」の授業の一環で沖縄を訪れた。初めて降り立って、なにもいえない異国感をこの島に感じた。本土に

「壁」だ。それは、沖縄と米軍・本土を隔てる壁である。

沖縄と米軍間では、両者が互いに嫌なものと映っている。沖縄にとって基地とは自分たちの生活を苦しめるもの。基地にとつて沖縄は恩知らずのうるさい島だ。お互いの壁である。本土の多くの人間が基地問題に蓋をし、見て見ぬふりをしてきた。何となく基地は必要だけど、本土にはいらない。Not in my back yard、という言葉はその感情を如実に表している。もしくは今まで沖縄にあり続けたものがいまさら、自分の裏庭にやってくるなど想像すらしていないかもしれない。

私が最初に抱いた異国感も、一種の壁である。遠く離れた島で起こっている基地問題に対して、外国で発生している紛争と同じような感覚で捉えていた。

辺野古のキャンプ・シュワブのフェンスに貼られたポスターはどれも、

米軍に対してではなく私たちに貼られていた。そのことに深い意味などないかもしれない。しかし私にはそれが、本土の人間に向けられたメッセージに思えた。

沖縄から帰ってきた今も、基地問題に関する答えは見つかっていない。しかしこれは沖縄の問題ではなく私たちの問題であるという事は、はっきりとしている。

そして忘れてならないのは、本土が享受している安全が、沖縄の犠牲のうえに成り立っているという事実である。この事実から目をそらさず、まずは各々の壁を取り払うことが、解決の糸口ではないかと思う。

文学部人文・ジャーナリズム学科「沖縄ジャーナリズム論」合宿5日間

大きくても小さくても

双方の声を聞こう

志田 美由紀(2年次)

小さい声はいつも大きい音にかき消される。それは実際の音の話だけではない。飛行機の音にかき消される人の声、報道される悪にかき消される報道されない善。

「沖縄ジャーナリズム論」で沖縄を訪れ、5日間を過ごした私はそう感じた。

住宅地の中心にある普天間基地を一望できる嘉数高台で、沖縄タイムス社論説委員長(当時)の

長元朝浩さんのお話を伺っていた。すると突然爆音が頭上を通過し、普天間基地の滑走路へと向かっていった。しかしその飛行機は着陸後、その勢いを落とすことなくまた飛び立っていった。これは「タッチアンドゴー」という飛行訓練のひとつである。その訓練の下では長元さんの話を聞くことも聞くことができなかった。報道や事前

学習で基地における騒音問題については少しだけ知っていた。

しかし実際に騒音の下に身を置いてみると、想像をはるかに上回るうるささであった。この環境の下での生活を強いられる人たちの声や会話、こんな大きい音にかき消されてしまい、聞こえないのかと実感した。

また、在沖米軍総領事のアルフレッド・マグルビーさんと在沖米軍海兵隊太平洋基地政務外交部長のロバート・D・エルドリッジさんから初めてアメリカ側の意見を聞いた。

彼らは「新聞は米軍のボランティア活動などを取り上げてくれない」と話した。

沖縄における基地とは米国の沖縄占領の歴史の遺物であり米兵は乱暴である、といった印象が日本国内にあるのは確かである。全国紙でも、沖縄の地方紙でも、一面に載るのは決まって米兵の犯罪や基地問題である。

在沖米軍がトモダチ作戦という東日本震災での救助・復興支援活動や地域の要請により訓練の公開や変更など地域との

彼らに話を聞かなければ知り得なかったことばかりだ。

小さい声を聞くには、近くへ行かなければ聞けない。また、小さい声は意識しない人には聞こえない。沖縄に住む人たちの声や在沖米軍の声以外にも沖縄にはもっとたくさんの小さい声があるだろう。

この小さな声を聞き取り、大きな音に負けないような大きさを伝えていくことが、沖縄ジャーナリズム論を受講した私たちの責任だと思う。

冬期日本語・日本事情 プログラム展開中



三鷹・シプリ美術館前で1月22日

長期留学生5人 14年度第1期

2014年度長期交換留学プログラム(第1期)派遣留学生が次の5人に決定した。(敬称略)

- 檀国大学(韓国)
- 澁谷有咲(経営2)
- 宗方美緒(文3)
- 上海大学(中国)
- 浅野翔秋(商2)
- マルティン・ルター大学ハレ・ウィッテンベルク(ドイツ)
- 池山翠(文2)
- 中山大学(台湾)
- 岡一輝(人間科学3)

本学の国際交流協定校などの学生が、日本語や日本文化を学ぶ冬期日本語・日本事情プログラムが1月10日から始まった。

フランスのリヨン政治学院など7カ国・8大学、社会人を含めた30人が参加。参加大学のうち、大同大学(韓国)はプログラム初めての参加となり、10人が来日して対象のホームステイなど、さまざまな体験をする。2月28日まで。

またプログラム以外にも、相撲のトナメント観戦や、群馬ハンゲル愛好会の方々のご協力により、2月初旬に実施するウルサン大学生(韓国)とのホームステイなど、さまざまな体験をする。2月28日まで。

NGO活動 記録写真展



昨夏、海外でNGO活動中に撮影した学生の写真展が1月15日から28日まで、生田キャンパス9号館アトリウムで開催された。写真展は経済学部国際経済学科の「NGO論」(狐崎知己教授)を受講し、タンザニア、インド、パングラデシュ、ベトナム、カンボジア、アメリカ、メキシコでの学生18人の20作品。現地の様子や人々の表情を捉えた力作ぞろいで、10作品ずつ2回開催した。

同科目は夏期休暇中に本学の補助金を得て、さまざまなNGOのスタディーツアーに参加。途上国の人々の立場に立った効果的な国際協力の在り方を考える。



大林守国際交流センター長を囲んで